ラグビーW杯2003
その七　tough

善戦空しく敗北の繰り返しを避けるために、tough＝まげても折れない強靭さについて改めてかんがえましょう。改めてタフでなければならないことを日本の戦い振りをみて痛感しました。どんなに頑張っても最後に息切れしてしまっては元も子もないということです。このことは、W杯・ラグビーゲームにかぎったことではなく物事全般に一般的にいえることです。脱兎のごとくスタートして、必死で全力をだしきっても、中折れしたり尻すぼみになっては、代表として責任を果たしたことにはなりません。物事は最後いかんできまるので、最後を完うしなければなりません。タフということについて、体力面と精神面があります。フイットネスについてはよく研究され努力されていますが、精神面即ちタフであることを意識的に組立て、努力することについて考える必要があると思います。

英語では数量を表す時にquarterがよく使われます。時間や時の経過を言うにもよく使われます。quarter＝ 4分の1です。準々決勝や4半世紀などという時にも使います。

試合を時間的に4つに分けて分析や作戦の切り替える場合に使われます。4分の1それぞれに意味づけし、内容を詰めて戦うことです。そのことは必死で全力を集中して戦うことと反することではありません。全力といっても、体力の消耗も限界もあります。失敗や予想違いもあるものです。切り替えなしに一本調子にやるだけやって力尽きたら終わりではいけないのです。華やかに散ることを貴ぶのは懐古的大和魂の名残と言わざるをえません。

日本の善戦に水をさすわけではありませんが、得点経過が手放しでは喜べないのです。7点以内の接戦は接戦そのものですが、中間のある時点における点差の少ないことで、短絡的に接戦といえないのです。常識的勝負の決まり所即ち後半の半ばから終わりまでの得点経過が試合の内容の最終評価を決定づけるものです。

前半一方的勝っていたのに後半逆転されるという試合は、点数以外の要素を問題にすべきですし、後半の中頃までの小点差が最後に開くということは、点数以上に実力の差があるということを証明していることになるのです。

three-quarterはラグビーの長い歴史の経過の中で、2つの意味に使われてきました。

BKバックスは、以前はT.B＝ three-quarter backsと言いました。FWがボールを獲得するのが本務とするのに対して、BKはトライするのが本務とされました。BKの活躍が勝負を決める大きな要素であることは言うまでもありません。

もう一つ時間の経過を示す場合です。前後半80分の4分の3経過した時間帯が勝負の決め所という意味にも使われました。時間設定のない相撲では、立ち上がりが非常に大切であり、時間に関係なく相手を倒すか土俵の外に出した方が勝ちです。立ち会いが大きな勝負所です。競走のマラソンでは、32km位が勝負所で、色々と駆け引きが行なわれます。ラグビーも4段切り替えが常識になれば無理と無駄がなくなり、プレーヤーも観客ももっとラグビーを楽しめます。全力でのフイットネスが前提になりますが、「脱兎の如く」まさにラビット宜しくスタートから飛び出して、終わりを全うできないのではなく、終わりのクオーターを最高に完うできる配分と組立をするための精神・頭脳の切り替えと平素の訓練が必要です。気持ちの上ではあきらめないということですが、あきらめない精神の強さは、訓練に裏づけされて発揮されるものです。スタートに置ける必死の悲壮感だけでは勝てないだけでなく、過度の緊張と振舞から過度の疲労を生み出してしまうのです。相撲は立ち合いが絶対的ですが、ラグビーはそうではありません。試合前の円陣を組んでの勇ましい叫び声、真剣な形相に期待していたら最初はともかくとして、後半はずるずる勝負ところで総崩れというパターンから抜け出すためには、そのような一般的な風潮が変わらなければならないでしょう。

2004.01.11
西川　義行